

多紀元簡『樞中鏡』について

成 高雅

京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程

受付：令和3年1月14日／受理：令和3年3月15日

要旨：本研究は、医学考証学派の代表人物である多紀元簡による著述『樞中鏡』について検討し、多紀元簡の蔵書と学問との関連を論じてきた。まず、現存する『樞中鏡』の諸伝本の所在と概略について調査し、『樞中鏡』の伝抄本が江戸後期から近世に至るまで知識人の間に流通していたことを明らかにした。次に、『樞中鏡』の内容について分析し、当書の性質、その編纂過程及び使用した資料の特徴を明示した。最後に、『樞中鏡』にみる多紀元簡の蔵書志向と元簡の学術的アプローチについて検討を試みた。『樞中鏡』の考察を通じて、当書の諸伝本の内容と系統を究明し、多紀元簡が中国同時代の学術書の価値を十分理解していたことを明らかに出来た。

キーワード：多紀元簡, 樞中鏡, 医学考証学派

はじめに

江戸後期の学術界で、独自の立場に立って歴史的業績を残し、高度に発達した医学考証学派は、中国の医学史研究者の間でも広く知られ高く評価されている。また、医学考証学派の研究と学術界諸思想との関連を背景として捉え、検討していく必要がある。その一環として、医学考証学派の知的基盤となる蔵書・及び書物から得た知識に目を向け、その学問的基盤の全体像を解明すべきであろう。

医学考証学派の代表と目される多紀家は、多紀元孝より、元恵・元簡・元胤・元堅・元听・元琰に至るまで、代々幕府の医官に任ぜられ、幕府の官立医学校である江戸医学館を取り仕切っていた。多紀家は医学館を拠点として積極的に書籍を収集し、関連する資料が現在に至るまで大量に残されており、それに関する研究も数多く行われてきた。森潤三郎氏の『多紀氏の事跡』¹⁾をはじめとする基礎研究のほか、医学考証学派の学問については町泉寿郎氏「医学館の学問形成」²⁾「医学館の軌跡：考証医学の拠点形成をめぐって」³⁾、廖育群

氏「漢方医学の落日余暉：江戸考証派の学術与社会」⁴⁾などの研究がある。これらの研究は極めて重要な成果であるものの、医学考証学派の学問発展と当時の中国の学問の展開との関係性について十分に言及されていない。医学考証学派の学術的アプローチについて検討する必要がある。

多紀元簡(1754~1810)は、医学館の学問を探求する上で最も重要な人物と言えよう。金谷治氏は大田錦城研究において、錦城と多紀氏との考証学的議論を詳しく検討し、「多紀家の学問はまさに元簡において考証学になった」⁵⁾と指摘した。町泉寿郎氏も、「多紀元簡には朱彝尊・錢曾・紀昀らの学業に対する高い関心がみられる。……多紀氏を中心とした医学館の考証学者は、江戸時代の清学受容史に恰好の材料を提供するものである」⁶⁾と論じている。

本研究では、元簡最初の著書と見なされているにもかかわらず、いままであまり関心が持たれていなかった『樞中鏡』という著述を取り上げて検討したい。『樞中鏡』は多紀元簡が中国の書物から蔵書関連の内容を集録・整理し、案語を付けて編集したものである。刊行されたことはないが、復

数の写本が存在する。森潤三郎氏は『考証学論考—江戸の古書と蔵書家の調査』⁷⁾と『多紀氏の事跡』⁸⁾において『樞中鏡』を元簡の最初の著書としている。しかしながら、管見の限り、『樞中鏡』の伝写状況を系統的に論じたものは未だ存在せず、その成立後における伝存状況もほぼ不明のままである。

そのため、本研究は、多紀元簡の蔵書・学問また知識人との交流を手がかりに、『樞中鏡』の伝本及び伝存状況について考察・検討し、元簡ないし医学考証学派の学問を明らかにしていくための一助となろう。具体的に、拙稿は三つの部分に分けて論じる。まず、現存する『樞中鏡』の諸伝本について調査・検討し、その伝本を文献学的に分類する。次に、『樞中鏡』の自筆本と諸伝本の構成と内容について比較検討する。最後に、『樞中鏡』に窺われる多紀元簡の蔵書志向と学問形成について若干の論及を試みる。

一、現存する伝本の所在と概略

『国書総目録』によると、『樞中鏡』は無窮会図書館織田文庫(本編, 統録共二冊)・国立国会図書館・九州大学・京都大学・西尾市岩瀬文庫・お茶の水図書館(現石川武美記念図書館)成篁堂文庫・早稲田大学で所蔵されている⁹⁾。

また、全日本古典籍総合データベースとCiniiの検索システムを利用して確認したところ、茨城大学附属図書館、筑波大学附属図書館と旧高梁市立中央図書館でも一冊ずつ所蔵されている。

以下は各伝本別にその所在と概略を紹介した。

1. 各伝本の所在と概略

1) 無窮会本(自筆本)

『樞中鏡』の自筆本は無窮会図書館織田文庫で所蔵されており、本編・統録ともに一冊ずつ、合計二冊である。無窮会の織田文庫は漢学者織田小覚(1858~1936)旧蔵書コレクションである。近年、無窮会図書館は閲覧休止になり、原本の調査はできなくなっている。今回は北里大学東洋医学総合研究所で所蔵されている自筆本の複製本を用いて検討した。

自筆本は、外・内題「樞中鏡」とする本篇と、外題「樞中鏡統録」・内題「書嵩叢編」と題する統録の二冊本となる。冒頭に織田小覚の蔵書印「織田氏図書記」があり、自序の最後に元簡の印「廉夫」など¹⁰⁾がある。版心に「万梅書屋」があり、跋文は載せられていない。

自筆本の内容は諸伝本と比べると、明らかに修正・増補された内容が多く、諸伝本と大幅に異なっている。諸伝本は、序文・本篇本文・本篇続・杉本樗園跋という五つの部分で構成される(筑波大学本のみ序文を欠く)。これらの内容は、杉本樗園跋を除き全文自筆本の第一冊目の本篇には存在するが、本文・見返し・上欄などに、元簡による修正・増補と案語が加えられているほか、本文として新しい文書も数多く収録されている。これらは諸伝本に反映されてないため、後に加えられた可能性が高い。二冊目の『樞中鏡統録』も、後に編纂された内容となる。この現象は、自筆本に見られる修正及び増補が完成されていない段階で、諸伝本が既に伝写されていた可能性を示唆する。具体的内容については、次の章で詳述する。

版心の「万梅書屋」について、少し検討する必要がある。佐藤静馬氏「多紀元堅の手紙」では、「万梅書屋」を多紀元堅(1795~1857)の号の一つとして挙げている¹¹⁾。しかしながら、伝抄された諸伝本の跋は1793年であるため、元簡が使い続けた自筆本の版心に1795年生まれの元堅の号のある用紙を使うのは不可能である。仮に「万梅書屋」は多紀元堅の号であれば、この自筆本が後に元堅によって複製されたものの可能性が高い。しかし、複製本を用いた現段階の考察においては、筆跡・蔵書印と増補した文書の内容・位置などに配慮すれば、無窮会所蔵の『樞中鏡』二冊が多紀元簡の自筆本であるとは考えられない。また、元堅が「万梅書屋」を自らの号と明記した資料は確認できていない。『多紀氏の事跡』では、多紀元堅の著述の一つである『裏鮮編』の記述に、「版心に万梅書屋と刻した」¹²⁾との記載がある。『裏鮮編』という資料の自筆稿が多紀崇徳氏蔵書にあったが、戦災で焼失したため¹³⁾、現在、検証できな

くなってしまったことは、非常に遺憾である。

次は、『樞中鏡』の諸伝本について紹介する。前述の通り、諸伝本は序文・本篇本文・本篇続・杉本栲園跋という五つの部分で構成されている（筑波大学本のみ序文を欠く）。序跋・奥書などの違いがあるものの、構成・テキストなどにおいて概ね一致している。序跋の増減のほか、他書と合綴した場合もあるため、それぞれの特徴について調査順に個別検討する。

2) 国立国会図書館本（国会本と略す）

国立国会図書館検索システムでは、当書は「[コ]中鏡」というタイトルで登録されている¹⁴⁾。国会本は、杉本栲園跋の次に伊沢蘭軒（1777～1829）と森約之（1835～1871）の奥書がある。

樞中鏡一卷、桂山先生丹波廉夫所著、従狩谷望之侑而來、石坂白可為余代鈔云。享和甲子春二月 源恬

案此本文字訛謬甚、殆不可読。其朱校者、或曰伊沢樾軒弱年書也、或曰朱墨並皆海津安純所書。安純跋在此冊末、此人早夭可歎云、此說可從。文久癸亥季春晦 森約之覈亭記

約之の文に「安純跋在此冊末」とあるが、実際、その跋は国会本には付いてない。また、現存するすべての伝本に安純跋が見当たらない。国会本の跋の情報から、狩谷核斎（1775～1835）がこの本を伊沢蘭軒に薦めたことがあり、核斎と当書との関わりがこれで確認できる。伊沢蘭軒が享和四年（1804）に石坂白可¹⁵⁾という人物の手を借りて一冊の写本を抄写し、その跋が付いた伝本が文久癸亥年（1863）に森約之の手に入り、案語も加えたという。しかし、国会本には蔵書印などの情報は一切存在しておらず、従って、その旧蔵者についても不明である。

森潤三郎氏の研究で使用されているのは、この国会本である。『多紀氏の事跡』に、以下のような記述がある。

筆者は京都に在る日、帝国図書館から借りて

写し、京都帝大図書館その他の蔵書で引用書を校正し、その誤字が多いのに驚いた。その手校本を某氏に借した処、大正癸亥の震災で焼失し、某氏は人を帝国図書館に遣って、写し返されたが、まだ全部を校正する暇を得ないのを遺憾とする。¹⁶⁾

これによって、森潤三郎氏が校正を加えた写本を一冊作成し、某氏に貸した後、大正十二年（1923）に焼失し、某氏は国会本を親本にした写本を返したという。

3) 京都大学本

京都大学本は京都大学文学研究科図書館で所蔵されており、外題は「樞中鏡 奇観録」とあり、『樞中鏡』と『奇観録』の合綴本である。

京大本では、杉本栲園跋の次に、下記の奥書がある。

樞中鏡一卷、侍医多紀安法印所集也。今借抄於新楽閑叟家。享和二年壬戌仲秋念七杏花園

「杏花園」は江戸後期の文人・蔵書家大田南畝（1749～1823）の号である。彼が享和二年（1802）に何らかの機縁で元簡の『樞中鏡』を借り、新楽閑叟という人物の家で抄写したという。

4) 早稲田大学本

早稲田大学本は早稲田大学中央図書館で所蔵されており、検索システムでは、「樞中鏡／櫛窓主人集著」というタイトルで登録されている。早稲田大学本は、早稲田大学図書館古典籍総合データベースにて公開されており、現時点で唯一インターネットに公開されている伝本である。

早稲田大学本の外題は「樞中鏡」とあり、版心に「梅軒」という二文字が印刷されている。「読杜艸堂」という蔵書印があるため、蔵書家・書誌学者寺田望南（1849～1929）の旧蔵書であったことがわかる。

5) 筑波大学本

筑波大学本は、筑波大学附属図書館中央図書館三宅文庫で所蔵されており、外題は「樞中鏡」とあり、外題の下に「甘雨亭主」の印が押されている。また、帙の書き題箋に「甘雨亭叢書 稿本五」とあり、版心に「甘雨亭叢書」と印刷されている。甘雨亭は野安中藩の藩主板倉勝明（1809～1857）の号であり、甘雨亭叢書は、板倉勝明が編集・刊行した叢書である。刊行された『甘雨亭叢書』に当書は含まれておらず、題箋にある「稿本」という情報で判断すれば、筑波大学本は板倉勝明が『甘雨亭叢書』を刊行するために収集したが、結局出版には至っていない写本の一つである可能性が高い。

諸伝本の中で、序文の付いていないのは筑波大学本のみであるが、本の末部の杉本樗園跋の次に大田南畝の奥書がある。

6) 茨城大学本

茨城大学本は茨城大学附属図書館菅文庫で所蔵されており、『菅文庫国書目録』に「樞中鏡 一冊 多紀元簡 二三・五×一六種」と記されている¹⁷⁾。茨城大学本の外題は「樞中鏡」とあり、冒頭に「福山岡西氏蔵書記」の蔵書印、版心に「望岳蔵」がある。最後に杉本樗園跋の前に、「文政五年五月朔書写畢 徳瑛」の奥書がある。当写本は伊沢蘭軒の門人である岡西玄亭（徳瑛）が文政五年（1822）に書写したものであり、蔵書印と奥書も玄亭によるものと考えられる。

7) 成篁堂文庫本

石川武美記念図書館成篁堂文庫は、徳富蘇峰（1863～1957）の旧蔵書コレクションである。『成篁堂善本書目』の「第八篇附載」に、成篁堂文庫本『樞中鏡』が以下のように記されている。

樞中鏡 一卷 統一巻 多紀元簡編

統樞中鏡 一卷 桜泉居士編

明治年間写本。壬子の秋、編者が病中諸書中聚書に関する事項を蒐め、翌春更に補へるもの。壬子重九前一日自序、癸丑四月杉本良（樗

園）の跋あり。劉桂山編といふ、編者の一名なり続に乙巳の自序あり。惜しい哉譌脱多し。¹⁸⁾

『成篁堂善本書目』は、長沢規矩也・川瀬一馬が徳富蘇峰の蔵書を選び、編纂した蔵書目録である。凡例によれば、「第八篇附載」は「和漢の珍籍にして善本の列に入れ難きものを附載したり」¹⁹⁾とある。

成篁堂文庫本の外題は「樞中鏡」で、下に朱筆で「珍本」と書いてある。当写本には徳富蘇峰の蔵書印「徳富所有」「蘇峰清賞」「蘇峰読書記印」などがあり、蘇峰による書き入れ・朱筆訂正、または傍線などの書き込みも見られる。

巻末に、蘇峰による三段の奥書があるが、右から下記のとおりである。

統樞中鏡係望南所贈焉。今併綴便一覽矣。
明治三十八十一月初二夕 蘇峰又識之

明治三十八年七月念四 寺田望南抄写攜来贈焉 予報之以寒山集及薩天錫逸詩一帙也。蘇峰学人識之

読本有不可句解者焉 須就善本 校其異同焉 蘇峰一清記

蘇峰の奥書によれば、寺田望南が書写した成篁堂文庫本『樞中鏡』は明治三十八（1905）年七月に、十一月には『統樞中鏡』が贈られ、それらを合綴したとある。

成篁堂文庫本にのみ見られる『統樞中鏡』について、下記の序文がある。

統樞中鏡序

友人寺田望南蔵樞中鏡一書、寛政年間多紀桂山所集、専録書籍購蔵之事。桂山積学洽聞、喜蓄書、精賞鑒、故採取頗富、敘次有条理。望南亦博雅好書、趨向略同。宜其於是書特有会心也。余借觀數日、披玩之余、就平生所見、又得十余条、試鈔付卷尾、尚有孫慶増蔵書紀要一卷、分購求、鑒別、鈔録、校讐、装訂、編目、収蔵、曝書八則論之、極為詳備。以文多不録、顧今距桂山集此時百余年矣。余所補録、率多後出之書、

但謬学寡聞，家少蔵書，如桂山望南二子之多蓄多読，固非可企及。則余之於此録，所謂対屠門而大嚼者也已。乙巳之復桜泉居士識

桜泉居士とは、漢学者小牧昌業（1843～1922）の号である。この序によれば、『続樞中鏡』は明治三十八年（1905）に作成され、蔵書に関する条目が十四項目集録されたことがわかる。成篁堂文庫本を通して、本書は明治期に至ってもまだ学者の間に流通していたことがわかる。この事実から、元簡の学問の後世にも及ぼした影響が窺われる。

8) 山田文庫本

山田文庫本は、旧高梁市立中央図書館山田文庫の旧蔵書であり、今は高梁市山田方谷記念館で所蔵されている。山田文庫本の外題は「孟子識 近聞遇筆 樞中鏡」であり、実際に『孟子識』の次に『孝経識』も写されており、『孟子識』『孝経識』『近聞遇筆』『樞中鏡』の四著述の合綴本である。版心に「猗々軒」があり、本文に朱・墨筆による訂正と注記が散見される。山田文庫は、山田家三代目の漢学者山田準（1867～1952）に寄贈を受けた書物を集めた文庫であり、江戸時代の学者による陽明学を中心とした書物、それ以外の洋学書、及び自ら開塾した長瀬塾や小阪部塾時代の史料が含まれる²⁰。「猗々軒」とは、山田準の書齋の名の可能性が高く²¹、恐らく山田文庫本は山田準によって抄写・訂正された資料であろう。山田文庫本にも、杉本栲園跋の次に大田南畝の奥書がある。

9) 岩瀬文庫本

岩瀬本は西尾市岩瀬文庫に所蔵されており、登録されている書誌情報のタイトルは「**三** {木偏・扈} 中鏡」である。岩瀬文庫の当書の紹介では、「中国明清代の蔵書家の著作より、蔵書・書肆・善本等、書物に関わる文章を摘録したもの。各条末尾に出典を注記する」²²と記されているが、摘録されたものは明清の著書に限らない。

岩瀬本の外題は「多紀元簡撰 樞中鏡」とあり、なかに朱筆による点・注と訂正があり、最後に杉本栲園跋の後に「臨江堂菊々」と書かれている。

また、冒頭に、「小沢文庫」「小沢皆園寄賞之印」という造園家小沢圭次郎（1842～1932）の蔵書印が二つ、更に「中根肅治」「肅字子成」「光風霽月」「中根蔵書」「処春畦」という書誌学者中根肅治（1847～1921）の蔵書印が五つあり、ここから岩瀬文庫本は小沢圭次郎と中根肅治の旧蔵書であったことがわかる。また、「臨江堂菊々」の次には「待価」の印がある。

『国書総目録』によれば、九州大学所蔵の写本も一つ存在するというが、九州大学附属図書館に問い合わせたところ、所在不明の資料であるとわかり、今回はやむを得ず、調査対象外とした。

2. 諸伝本に見られる異同及び系統分類の私案

筆者の調査から、現存する『樞中鏡』の諸伝本の所在と概略が明らかになった。したがって、諸伝本における本文の異同を比較し、それに基づいて、現存する写本の系統分類もできる。

諸伝本のテキストを確認したところ、文献学的に注目すべきところが二箇所ある。まずは、大田南畝の奥書の有無である。大田南畝の奥書が付いている伝本は、大田南畝が書写した写本を親本として伝抄されたものと考えられる。また、テキストにおける誤写は各伝本に数多く存在するが、『博聞類纂』の文書を引用する際に、著者の名前「商景哲」を「尚景哲」と誤写する特徴が見られる。この誤写のある伝本は、同じ親本に基づいた可能性がある。

筆者は、各伝本のテキスト的特徴を意識し、内容の比較検討を行った。大田南畝の奥書が付いている京都大学本・筑波大学本と山田文庫本は、テキストも概ね一致し、一つの系統と分類する。また、「尚景哲」の誤写のある国会本・早稲田本と成篁堂文庫本のテキストも概ね一致するため、一つの系統と分類する。早稲田本と成篁堂文庫本は、前節で述べたように、ともに寺田望南と関わることもわかる。

ところで、岩瀬文庫本と茨城大学本のテキストに誤写が少ない点が特に注目すべきである。茨城大学本は、「文政五年五月朔書写畢」と文政五年（1822）に書写年が明記されている。この二種の伝

本は、伝抄された自筆本に近い親本を写した可能性が高い。

自筆本にある修正と増補が、他の諸伝本にすべて反映されていないため、独立した一つの系統に分類すべきと考えられる。このように、現存する諸伝本を四つの系統に分類した²³⁾。〔 〕内は、筆者が付けた現存する諸伝本の名称であり、その前に旧蔵者名を付した。存在しないもしくは現存する伝本が確認できないものは、伝播経路を示すために { } を付した。

- 1) 増補後の自筆本→織田小覚〔無窮会自筆本〕
- 2) {増補前の自筆本} → {杉本樗園(1793跋)} → ?
 {大田南畝跋(1802跋)} → 板倉勝明〔筑波大学本〕
 → [京都大学本]
 → 山田準〔山田文庫本〕
- 3) {増補前の自筆本} → {杉本樗園(1793跋)} → ?
 ① → {狩谷椽斎} → {伊沢蘭軒(1804石坂白可抄, 伊沢蘭軒または海津安純朱筆訂正)}
 → {森約之(1864案)} → [国会本]
 ② → 寺田望南〔早稲田大学本〕 → 徳富蘇峰〔成簀堂文庫本〕(1905写)
- 4) {増補前の自筆本} → {杉本樗園(1793跋)} → ?
 → 岡西玄亨〔茨城大学本〕(1822写)
 → {小沢圭次郎} → 中根肅治〔岩瀬文庫本〕

このように元簡が編纂した増補前の『樞中鏡』は、江戸後期から近代までの学者・知識人などの間で、書写によって複製され、伝播したことがわかる。無論、元簡の学問を探求するには、『樞中鏡』の編纂過程も含め、その内容を検討しなければならない。以下の検討では、自筆本以外の諸伝本の内容を指す際に、「伝抄本」と呼ぶことにする。

二、『樞中鏡』の構成と内容

1. 伝抄本の構成と内容

前述のように、『樞中鏡』の伝抄本は、序文を欠

く筑波大学本を除き、すべて序文・本篇本文・本篇続・杉本樗園跋という五つで構成されており、文書の次に元簡による案語と注記も見られる。

序文は寛政四年(1792)元簡が書いた自序であり、本書の編纂意図を述べている。内容は以下の通りである。

余常謂近代藏弄家、莫如竹垞遵王焉。今秋病痺、屏居数十日、偶取二氏書、及繙古旧鈔閱之、古人所以能致富于斯者、竭畢世之心力耳。亦奚易々乎哉。因採集閩涉聚書一事者、録為数十頁、額曰樞中鏡、余也事務倥偬、又每囊空々如也、嫻嫻羽陵不可津逮、世之志于挿架懸籤者、先讀此篇、体古人之篤志、以広訪博搜、則雖身在溟渤外、曝書之亭、也是之園、実可企及而已。壬子重九前一日、櫟窓主人識

本篇続の前に、寛政五年(1793)と書かれた下記の内容がある。

癸丑孟春初二、終日無事。因手整書、偶得此冊、更続數則。

各伝本の巻末に幕府医官杉本樗園(1770~1836)による寛政五年(1793)の跋がある。

此篇劉桂山先生之所著、取藏家事跡歴歴可考矣。蓋先生博物洽聞、高於当今、是時昌歌之余云。然使取藏家讀之、則可以知前脩之篤心、又可無有書不讀之誚、真可為樞中之鏡也。矧其援引奇帙秘函、世所稀伝、此豈得僅冊子視之哉。癸丑四月一日樗園杉本良記

本文は、各篇の冒頭に、「……云」「……曰」と作者を述べ、各節の内容の最後に引用した書名を付す形である。

伝抄本に集録した本文内容を、表1のようにまとめた。

集録された内容からみると、蔵書関連の文書を集めただけでなく、それぞれの主旨から元簡の編纂意図が窺える。表1の順番のように、各部分の内容は以下のようにまとめられる。1は蔵書に

表1 『樞中鏡』伝抄本に集録した内容一覧

順番	時代 ²⁴⁾	作者	引用書名	原作者 ²⁵⁾	タイトル ²⁶⁾
伝抄本本編					
1	宋	陸游	渭南文集		万卷楼記
2	明	徐燭	徐氏筆精	楊文貞	奇文籍志序
3	明	胡応麟	少室山房筆叢	陸文裕	蔵書目序
4	清	朱彝尊	曝書亭集		曝書著録序
5	清	朱彝尊	曝書亭集		池北書庫記
6	明	謝肇淛	五雜俎		宋人多善蔵書
7	明	謝肇淛	五雜俎		求書之法
8	明	謝肇淛	五雜俎	胡応麟	蓋得之金華虞參政家
9	清	陳繼儒	珍珠船		柳氏序訓云
10	清	徐燭	徐氏筆精		吾鄉前輩蔵書富者
11	清	徐乾学	憺園文集		葉石君伝
12	清	錢謙益	有學集		述古堂宋刻書跋
13	清	褚人穫	堅瓠集		題書厨
14	明	屠隆	考槃余事		書貴宋元者何哉
15	明	謝肇淛	五雜俎		書所以貴宋板者
16	明	胡応麟	少室山房筆叢		五代時馮道始奏請官鑄板印行
17	明	胡応麟	少室山房筆叢		宋時板本盛行
18	清	陳繼儒	岩栖幽事		抄本書如古帖
19	清	王士禎	居易録		今人但貴宋槧本
20	明	屠隆	考槃余事		凡刻之地有三
21	清	王士禎	居易録		陸文裕金台紀聞云
22	清	王士禎	居易録		宋謝邁幼槧竹友集十卷
23	明	王世貞	弇州四部稿		前後漢書跋
24	清	陳繼儒	筆記		元美公有宋刻兩漢書
25	明	錢謙益	初學集		跋前後漢書
26	明	錢謙益	初學集		京山李維柱
27	清	錢謙益	有學集		書旧蔵宋雕兩漢書後
28	清	王士禎	分甘余話		趙承旨家宋槧前後漢書
29	清	宋犖	筠廊偶筆		王弇州先生旧蔵宋板漢書
30	清	劉体仁	七頌堂識小録	姜二酉	宋板書所見多矣
31	清	宋犖	筠廊偶筆	王士禎	余郷張忠定公蕃宋槧文選
32	清	錢曾	説書敏求記		夢梁録二十卷
33	清	錢曾	説書敏求記		楊銜之洛陽伽藍記五卷
34	明	屠隆	考槃余事		凡書之直之等差
35	清	王士禎	香祖筆記		乙酉有書賈來益都之顔神鎮
36	明	張壹	疑耀		宋紙背面皆可書
37	清	錢謙益	有學集		方言跋
38	明	屠隆	考槃余事		凡印書
39	明	謝肇淛	五雜俎		閩建陽有書坊
40	明	胡応麟	少室山房筆叢		凡燕中書肆
41	清	王士禎	古夫于亭雜録		昔在京師
42	清	錢謙益	有學集		跋新序
43	清	錢曾	説書敏求記		陸游南唐書十八卷
44	清	錢曾	説書敏求記		成玄英疏莊子二十卷
45	宋	陸游	渭南文集		跋京本家語
46	宋	袁褱	楓窗小牘		余家蔵春秋繁露
47	明	李東陽	懷麓堂文集		徐本字以道
48	宋	陸游	渭南文集		跋東坡集
49	清	錢曾	説書敏求記		史記一百三十卷
50	清	錢曾	説書敏求記		考古圖十卷統考古圖五卷積文一卷
51	清	楊謙	竹垞年譜	何焯	説書敏求記跋
52	明	胡応麟	少室山房筆叢		張文潛柯山集一百卷
53	明	王士禎	居易録		子家自太僕司徒二公堯祥
54	清	張壹	疑耀		古裝書法
55	清	錢曾	説書敏求記		雲煙過眼録一卷
56	清	錢曾	説書敏求記		日本書籍裝潢
57	清	陳繼儒	群碎録		書曰帙者古人書
58	清	高士奇	獨且集		内府所蔵内景経
59	明	邱濬	瓊台會稿		蔵書石室記
60	元	趙孟頫	松雪書跋		趙子昂書跋
61	宋	張邦基	墨莊漫録	司馬光	吾每歲以上伏及重陽間
62	明	屠隆	考槃余事		蔵書
63	明	商濬	博聞類纂		麝香収書厨内
64	明	黄省曾	五岳山人集		庚辰冬日説太平御覽
65	清	方以智	物理小識		書厨可置樞腦
伝本本編統補					
1	明	徐燭	徐氏筆精	姚叔祥	蔵書
2	明	徐燭	徐氏筆精	楊文貞	楊文貞公士奇少孤貧
3	明	徐燭	徐氏筆精	季德茂	宋季德茂環積墳籍
4	明	徐燭	徐氏筆精		保守書籍
5	明	徐燭	徐氏筆精	陳貞鉉	聚書十難
6	明	徐燭	徐氏筆精	陳貞鉉	借書
7	明	周亮工	頼古堂蔵弄集		徐巨源与錢牧齋求宋集書

あるべき志向を述べている。2~12は蔵書家の収書経歴などについて述べた記事である。13~22は書誌学的論述、特に宋版についての詳しい論説である。23~30はいずれも王世貞の宋刻趙文敏旧蔵二漢書に関する論述である。31~39は、書物の優劣判断に関する文書をまとめた部分である。40~41は書店や書市の様子について紹介する。42~49は、校正・補訂に関する記録である。50~53は、蔵書家の書物の貸し借り及び購買に関する記事である。54~65は、書物の装訂・保護に関する情報を集めた部分である。また、続補で追加した文書は『徐氏筆精』の記述が六つと『蔵弄集』の記述が一つ、内容は主に蔵書・収書の難しさと本の貸し借りに対する考え方である。

使用した資料を、一つの文書として摘録したり、二篇に分けたりと、編集した痕跡が数箇所ある。また、版本学的内容が非常に多く、特に宋版の特徴や版本鑑定に対する関心が高い。資料は明清の書物が多く使われ、数から言うと72篇のうち明と清の著書が33篇ずつ計66篇となっており、本書の主幹となる分量を占めている。

序跋の内容と本文の構造から考えると、この時点で伝抄本の『樞中鏡』は、編纂を終え、成立していたと思われる。

2. 増補後の自筆本の構成と内容

自筆本は、外・内題「樞中鏡」とする本篇と、外題「樞中鏡続録」・内題「書崑叢編」と題する続録の二冊本となっている。自筆本を検討するにあたって、成立年代の推定が極めて困難である。自筆本の本篇増補・続録には、明確に編纂時期を示している記録がなく、ただ続録の案語に、「癸亥仲春廿八日得毛氏刊本陶集抄之」「丙寅仲春中浣元簡記」二条のみ記載がある。しかし、この案語により、文化三年(1806)までは、元簡はこの本を編纂し続けていたことが明らかである。

自筆本の増補内容と書き込みがやや複雑であるため、検討に入る前に、書き込まれた文書の位置と伝抄本との関係について説明する。自筆本は二冊あるが、本稿では一冊を「本篇」とし、もう一冊を「続録」とする。「本篇」に関しては、伝抄本

に増補した内容を、書き込み位置により五つに分類する。本篇序文前の扉や遊紙に書かれていた内容を、「本篇増補(序文前)」とする。伝抄本の本篇続、すなわち寛政五年に続録した七節の前の内容を「本篇(伝抄本本篇)」とし、続録した七節の内容を「本篇(伝抄本続)」とする。この二つの部分の内容は伝抄本と一致しているため省略する。「本篇(伝抄本続)」に引き続き増補した内容を「本篇増補(伝抄本続後)」とする。また、文書は一つだが、「本篇(伝抄本本篇)」と「本篇(伝抄本続)」の間に増補があり、それを「本篇(伝抄本続前)」とする。

増補で集録した文書は、上記書き込み位置別に表2のようにまとめた²⁷⁾。

表2にまとめたように、自筆本は本篇に三十三節、続録では二十六節の文書を集録し、合計五十九節の文書を増補している。

自筆本は自序の前に、書名にある「樞」の字について解釈を加えている。

樞 集韻候古切、音戸、籍書具。

書夾板即書樞、見高攀竜事物別名。

本篇増補(伝抄本続後)の最後の文書28の次に、『茶余客話』『如是我聞』『隨園詩話』『文房肆考』四書の書名と文書のタイトルが記されているが、内容は集録されていない。これらはすべて伝抄本に出ていない清の著作であり、後に補足を予定していた文書のメモの可能性が高い。

本篇に増補された内容は、位置から増補時の考え方を推測できる部分もある。例えば、本篇増補(序文前)の五つの文書と本篇(伝抄本続前)の一部は、書物の装訂・保護に関する内容であり、伝抄本本篇最後にある54~65の内容を補足したものと考えられる。本篇伝抄本続後の増補は、新しく入手または参考にした資料を使って本篇を補充したと考えられる。内容は、伝抄本と同じく蔵書志向・収書・版本鑑定・書籍の装訂保護などを集めたものだが、伝抄本のように順番に述べておらず、書籍別に文書を集録している。

第二冊目『樞中鏡 続録』の内題は「書崑叢編」

表2 『樞中鏡』自筆本の増補で集録した内容一覧

位置	順番	時代	作者	引用書名	原作者	タイトル
本篇増補（序文前）	1			汀州志*		嚴桂有逐月開者
	2	清	徐昆	柳崖外編		陽城煤炭賤而美
	3	清	陳元竜	格致鏡源		余閱宋板書等五則
	4	清	陳悞子	秘伝花鏡		蘭一名水香
	5	清	袁棟	書隱叢說		歸田録云
本篇（伝抄本統前）	1	明	徐渤	徐氏筆精		予喜蓄古書古帖
本篇増補（伝抄本統後）	1	宋	朱熹	童蒙須知		凡書冊須要愛護
	2	清	葉盛	菴竹堂稿		菴竹堂書目序
	3	清	葉盛	菴竹堂稿		書廚銘
	4	清	錢謙益	絳雲樓書目	朱陵	絳雲樓書目跋
	5	清	杭世駿	道古堂集		欣託齋藏書記
	6	明	宋濂	宋學士文集		倪維德字仲賢
	7	清	吳偉業	梅村集		汲古閣歌
	8	清	胡震亨	海塩県図経		胡彭述字信甫
	9	清	王士禎	蚕尾集		跋世説侯鯖録
	10	清	王士禎	蚕尾集		跋世説新語
	11	清	王士禎	蚕尾集		跋研北雜志
	12	清	王士禎	蚕尾集		跋鳴盛集
	13	清	王士禎	蚕尾集		跋山谷精華録
	14	清	王士禎	蚕尾集		跋金薤琳琅二則
	15	清	阮葵生	茶余客話		江南藏書
	16	清	阮葵生	茶余客話		張力臣符山堂藏書
	17	清	吳長元	宸垣識略		按乾隆癸巳年
	18	清	吳長元	宸垣識略		浙江鄞縣范氏天一閣
	19	清	袁枚	隨園詩話		余少貧不能買書
	20	清	袁棟	書隱叢說		余雅有書癖
	21	清	金有理	太湖備考		葉樹蓮字石君
	22	清	查嗣琛	查浦集聞		奉天老民閔中人
	23	宋	計有功	唐詩紀事	文徵明	唐詩紀事跋
	24	明	徐渭	青藤山人路史		
	25	清	王世貞	彙苑詳註		瓦矢矣狀如野蒿
	26			本草必読*		避蠹魚
	27			黃予章二十八卷*		顔氏家訓曰
	28	明	徐渭	徐文長文集		芸閣校書篇
統録	1	明	張丑	真跡日録		王元美尚書家藏宋梓書籍
	2	明	張應文	清秘藏		藏書者貴宋刻
	3	清	李斗	揚州画舫録		錢蒼佩湖州烏程人
	4	明	陳第	世善堂藏書目録		一齋公世善堂藏書目録題詞
	5	明	陳第	世善堂藏書目録	鮑以文	世善堂藏書目録跋
	6	明	祁承燾	澹生堂藏書目録		澹生堂藏書約
	7	明	祁承燾	澹生堂藏書目録		庚申整書小記
	8	宋	晁公武	郡齋読書志	陳師曾	序（余自髫時即好書籍）
	9	宋	晁公武	郡齋読書志		晁昭德郡齋読書志序
	10	宋	晁公武	郡齋読書志	杜鵬	門人承議郎新奏辟通判茂州軍州事賜緋杜鵬序
	11	宋	晁公武	郡齋読書志	黎安朝	序（昭德先生読書志四卷）
	12	宋	晁公武	郡齋読書志	趙希弁	序（昭德先生校井氏書）
	13	宋	晁公武	郡齋読書志	黎安朝	跋（昭德先生三榮郡齋読書志四卷）
	14	宋	晁公武	郡齋読書志	遊鈞	跋（昭德晁公侍郎）
	15	清	黄之隽	唐堂集		書目序
	16	清	黄之隽	唐堂集		後書目序
	17			陶淵明集	毛辰	淵明集跋
	18	宋	張世南	遊宦紀聞	許翰	初予与長睿父見古太支於中秘書
	19	清	尤侗	良齋雜説		今人藏書多以善佃購求宋板
	20	明	謝肇淛	五雜俎		内府秘閣所藏書
	21	清	沈初	浙江採集遺書総録	王賈望	浙江採集目録序
	22	清	蔣士銓	忠雅堂集		翁覃溪前輩
	23	清	蔣士銓	忠雅堂集		放翁博雅人
	24	清	毛奇齡	西河合集		存心堂藏書序
	25	清	茅坤	茅鹿門文集		万卷樓記
	26	清	徐鉉	南州草堂集		菊莊藏書目録自序

であり、集版本学的内容の他、主に本篇に収録していない各種書籍目録・蔵書目録の序跋文を集めたものである。

自筆本の本篇増補と続録に集められた文書は伝抄本と似ているが、後に加筆した痕跡が明らかで、伝抄本のように意図的に編纂されていないことも明白である。伝抄本は伝播していたが、元簡は『樞中鏡』への増補を少なくとも文化三年(1806)まで、十三年以上も続けていた。増補部分は、清の著述が圧倒的に多く、五十九節の文書のうち三十六節以上ある。また、書籍自体は清のものでないが、清の刊本を使って序跋文を集録した内容も少なくない。こうして元簡は同時代の清朝の学術に強い関心を持ち続け、常に最新の学術成果に接触し、晩年に至るまで『樞中鏡』を増補し続けていたようである。使用・言及のある著書には、当時において最新であった康熙・乾隆年間の書物が少なくない。中でも『茶余客話(1771)』『文房肆考(1778)』『宸垣識略(1788)』『如是我聞(1791)』などは、ほぼ元簡と同時代に出版された書物であり、意図的に最新の清の書籍の入手に努めていたと推測できる。

3. 編纂に関する考察

諸伝本と増補後の自筆本の内容は、前節の通り整理されていた。整理で見つかった注目すべき数箇所に関して、幾つか考察を行いたい。まず、自筆本で、本篇伝抄本12番にあたる資料・徐乾学『憺園文集』から集録した「葉石君伝」の内容の次に、「阮吾山云、観此則所云、伝是樓書目、殆未寔有是書耶」という案語がある。同じところに、山田文庫本でも「阮吾山曰、観此則所云、伝是樓書目、殆未寔有是書耶」と朱筆でこの内容を加えている。この案語は阮葵生『茶余客話』で「葉石君伝」に対するコメントで、他の伝抄本では見られず、恐らく元簡が『茶余客話』を読んだ後に自筆本の本篇に加えた案語と考えられる。山田文庫本の朱筆注記を確認したところ、山田準が自ら加えた増補であると判断できた²⁸⁾。つまり、二人は偶然にも同じ文書に対して同じ注記を補足したことである。山田文庫本では、もう一つ注目すべき朱

筆注記がある。伝抄本54番の資料『疑耀』の引用では、すべての伝抄本が「李卓吾曰」と、『疑耀』作者を李贄としている点である。『疑耀』の作者は、清の学者によって張瑩であることが証明されている。自筆本にだけ、「張孟奇曰」とされている。筆者は自筆本の複製本を用いているので、修正痕跡の確認は筆者の目には困難を極めたが、元簡が修正したことは明らかである。山田文庫本では、「李卓吾」の上欄に「李卓吾三字作張孟奇」との朱筆訂正があり、旧蔵者によって細かく読まれてきた形跡から、訂正されていることもわかる。このように、山田文庫本の全冊に校正が加えられたことで、写本の精度が高められている。

『樞中鏡』の集録に使われた資料の来歴についても、推察できるものがある。伝抄本本篇51番の何焯による「読書敏求記跋」は、最後に『竹垞年譜』と出処が記されている。この『竹垞年譜』という資料を探ると、多紀元簡の文集である『樸窓草堂文集』に、「読書敏求記跋」というタイトルの記述が見つかる。

右見楊謙所纂竹垞先生年譜、予乙巳暮春得此記槧本於叡南書肆。以為寶、架中之冠矣。明年佐伯源侯高標聞之、使使來借、命侍鈔一本。後予与侯交深、侯之嗜書一猶也是老人、聚蓄数万卷、奇帙奧編、靡所不有。予既嘆其儲藏之富、而憾特缺此記槧本也。丁未秋、自泊侯往其封、隨携去為之贖。侯大喜、因留与嚮所鈔、此本乃是。故開卷首頁有一印、曰佐伯侯紅粟齋秘牘記。偶錄朱氏年譜文、並及此云。寛政辛亥晚冬樸窓某書²⁹⁾

ここの「偶錄朱氏年譜文」は、元簡が寛政辛亥年(1791)に『竹垞先生年譜』の文書を抄録したことを示すものである。年代から推測すると、この時『樞中鏡』の集録を行っていた可能性が高い。ここには、抄録した『竹垞先生年譜』の入手経路について記述している。元簡は天明五年(1785)に、『竹垞先生年譜』の刊本を入手した。天明七年(1787)の秋に、元簡が毛利高標に当書の刊本を贈ったかわりに、毛利高標が作った写本をも

らったことが記されている。こうして、『樞中鏡』の集録に使われた『竹垞先生年譜』は、毛利高標による写本であることがわかる。集また、『樞中鏡』に収録された資料には、現存しないものも多い。中国ではすでに散逸しており、日本にだけ伝存するものも含まれている。伝抄本の63番、明・商濬編『博聞類纂』はその一例である。当書は『明史』芸文子部の類書に、「商濬 博聞類纂 二十卷」との記載があるが、『中国古籍総目』などの中国現存各目録書には載せられていない。日本では現在前田育徳会尊経閣に明刊本八冊、東北大学狩野文庫に写本十冊、公文書館内閣文庫に写本四冊が所蔵され、いずれも20巻本の完本である。

このように、集蔵書家を志す人たちのために、中国の著書の中の蔵書に関する記述を集録し、蔵書に関するマニュアル的参考書『樞中鏡』が編纂された。使った資料は明清の書物が多く、集録した内容に版本学的内容が多いことが特徴である。その伝抄本が、江戸後期の知識人の間に流通していた。次は、『樞中鏡』における多紀元簡の蔵書志向と学問形成について検討する。

三、『樞中鏡』における多紀元簡の蔵書志向と学術的アプローチ

1. 多紀元簡の蔵書志向

『樞中鏡』に集録されている内容には、版本・書誌・校勘に関するものが多数見られる。自序から、本書は蔵書のマニュアル的参考書として編纂され、多紀元簡本人の蔵書志向が反映されている。

冒頭の「万卷楼記」に、蔵書と学問の関係について以下のように論述されている。

学必本於書。一卷之書，初視之若甚約也。後先相參，彼是相稽，本末粗精，相為發明。

其所閔涉，已不勝其衆矣。一編一簡，有脫遺失次者，非考之於他書，則所承誤而不知。同字而異詁，同辭而異義，書有隸古，音有楚夏。非博極羣書，則一卷之書，殆不可遽通。此學者所以貴夫博也。自先秦兩漢，訖于唐五代以來，更歷大亂，書之存者既寡，學者於其僅存之中，又莽鹵焉以自便，其怠惰因循曰：吾懼博之溺心也。

豈不陋哉。故善學者通一經而足，藏書者雖盈万卷，猶有憾焉。而近世淺士，乃謂藏書如闢草，徒以多寡相為勝負。何益於學。

つまり、蔵書という行為は、学問の基礎を構築するものとなり、それ自体も鑑定・版本・校勘など複数の知識領域と関わっている。このように蔵書に関する知的体系をもった上での研究資料の構築こそ、多紀元簡が思う正しい蔵書のあり方であろう。元簡がそれを『樞中鏡』のはじめに置いたことは、蔵書と学問の関係を強調する意図も窺える。金谷治が「多紀家は……宋版のような貴重本も所蔵していたこと、しかもそれが単なる骨董趣味ではなくて版本としての優秀さという正に考証学的な関心から尊重されている」³⁰⁾と指摘するように、多紀元簡は、版本学的関心、もしくは正しいテキストへの高い関心があったと見られる。

多紀元簡が自身の専門領域—医学において、体系的に医学書を積蓄し、そして幕府から金銭的支援を得て官立化された医学館の蔵書形成に繋げていった。多紀家が残した複数の蔵書目録はその手がかりとなるが、自らの取書に関して、彼は『傷寒論輯義』(1801)自序に、

唯癖嗜聚書，以所入之贏，頗多儲蓄。……於是公私応酬之暇，陳所儲畜，逐条歴考，旁及他書，広求密搜，……而期闡發其隱奥，臨証以弁疑，処方得精当而已。……³¹⁾

と書いている。彼は書物を研究資料として集め、それに基づいて考証を行い、最終的に精度の高いテキストを得て医学的(臨床的)応用を目指すとして述べている。また「聿修堂架蔵志序」で、彼は子孫にもその蔵書志向を伝えようとしている。

……歴觀世医家，無有蔵書者。而或有為，無有子孫能受之者，況於増之乎。而或有為，無有能読者。而或有為，無有能読者，而施之于事者矣。冀我子孫能蔵能守，能増能読，而施之事，以精究方術也。則吾儕所以報於国恩之万一也。是某所以望于子孫也。……³²⁾

元簡の二子、元胤(1789~1827)と元堅は医学館の蔵書を引き継いで、学術研究を発展させた。現存の多数の多紀家旧蔵書や蔵書目録から、学問のために良質な書物の収集に徹っていた姿勢が窺える。

多紀家は医学書の考証を専業とし、正誤の検討を行っていたため、当時としては最新の医学書であった明清の文献にあたる必要があった。また、医学書のみならず儒書も参照することで、研究の最新動向も把握しようとしていたと考えられる。『樞中鏡』自筆本の編纂過程において、元簡が使用した書物は収書を示すものだが、元堅の代になっても続けられていたことは、多紀元堅の旧蔵書目録の一部である『存誠菴室蔵儒書目』によって明

確である。この目録は現時点では唯一の多紀家蔵書の儒書を四部分類で記したものである。注目すべきは、戴震・錢大昕・王念孫・王引之・段玉裁など最新の乾嘉の学者たちの著書を広く収めていることである。『存誠菴室蔵儒書目』にある清朝学者の著書を表3にまとめた³³⁾。

町泉寿郎氏は、この目録によって「多紀元堅はいわゆる乾嘉の学の成果を当時としてよく収集している」³⁴⁾と指摘する。もちろん、元堅もただ収書するにとどまらず、乾嘉の学の最新成果を積極的に応用していたと考えられる。その一例として、元堅が元簡著『扁鵲倉公伝彙攷』を整理補訂する際に、乾嘉の学者の考証内容を証拠として増補していることがあげられる³⁵⁾。清学の吸収が、

表3 『存誠菴室蔵儒書目』にある清朝学者の著書

書名	作者	書名	作者	
經	十三經注疏并經典釋文校勘記	阮元	硯雲乙篇	金忠淳
	左伝杜解補正	顧炎武	芝菴集記	陸雲錦
	經義述聞	王引之	閔微草堂筆記	紀昀
	爾雅正義	邵晋涵	鉄槎山房見聞録	于克襄
	方言疏証	戴震	翼駒稗編	湯用中
	經伝釈詞	王引之	古今秘苑	墨磨主人
	積草小記積虫小記	程瑤田	玄応一切経音義校正	莊圻 錢坫 孫星衍校
	九穀考	程瑤田	遂初堂文集	潘耒
	続字匯補	呉任臣	白田草堂存稿	王懋竑
	広雅疏証 博雅音	王念孫	西泚居士集	王鳴盛
	説文解字注	段玉裁	小倉山房文集	袁枚
史	武事余記	魏源	彫菰楼集	焦循 焦廷琥
	金石文字記	顧炎武	瀛奎律髓刊誤	紀昀批評
	彙刻書目	顧脩	歷朝詠物詩選	俞琰
	愛日精廬蔵書志	張金吾	経世文編抄	賀長齡
	読書敏求記	錢曾	曝書亭集	朱彝尊
	四庫未収書提要	阮元	潜研堂詩集 統集 文集	錢大昕
	四庫全書総目		紀文達公遺集	紀昀
子	庚子銷夏記	孫承沢	歴代題画詩類	陳邦彦
	困学紀聞集証	七箋本	庚辰集 唐人試律説	紀昀
	日知録	顧炎武	日問齋文鈔	陸燿
	潜邱劄記	閻若璩	金石要例	黄宗羲
	十駕齋養新録	錢大昕	随園詩話	袁枚
	三余偶筆	左暄	西陲竹枝詞	祁韻士
	香祖筆記	王士禎	抱經堂叢書	盧文弨 校
	瀛舟筆談	阮亨	経訓堂叢書	畢沅 校
	佩文韻府		知不足齋叢書	鮑廷博 編刊
	韻府拾遺		平津館叢書	孫星衍 校
	類腋	姚培謙	甌北詩鈔	趙翼

多紀家の学問を元堅の代に更に考証学的になされた原因の一つと考えられる。

上述のように、多紀元簡が『樞中鏡』を集録するにあたってその蔵書志向を示し、その子元堅も父の志に従って、最新の研究資料を大量に収集した。これらの資料を所蔵した医学館は、江戸の儒学者が出入りする社交場となり、その蔵書を用いて講義する場ともなっていた。これは、多紀家と儒学者たちを密接に結びつけたのみならず、当時の考証医学発展の拠点となった。彼らの努力が医学館の良質な蔵書蓄積を導き、医学考証学派の学統成立と展開の重要な基礎ともなった。

2. 多紀元簡の学術的アプローチ

『樞中鏡』は多紀元簡の読書に関する資料を紹介するとともに、元簡の学問的関心も反映している。元簡の考証的学問の形成を探求するにも、『樞中鏡』にいくつか手掛かりとなる内容が見られる。

『樞中鏡』には、『少室山房筆叢』の引用が数多い。その作者である胡応麟(1551~1602)は明代の学者で蔵書家であり、大量の著書を残した。『少室山房筆叢』は考証的筆記を主とする著書である。林慶彰氏は『明代考証学研究』において、胡応麟の考証学的学問に関し、その古版本に対する客観的態度を評価し、彼を明朝考証学の代表的人物の一人として挙げている³⁶⁾。『樞中鏡』には、以下のように記述されている(伝抄本資料の16番)。

胡元瑞云：……自是書籍刊鏤者，益多士大夫，不復以蔵書為意。學者易於得書，其誦讀亦因減裂。然板本初不是正，不無訛誤，世既一以板本為正，而蔵本日亡，其訛謬者，遂不可正，甚可惜也。(以上葉少蘊云)今書貴宋本，以無訛字，故觀葉氏論。則宋之刻本，患正在此。或今之刻本，當又訛于宋耶。余所見宋本，訛者不少，以非所習不論。(筆叢)

「今書貴宋本……」の内容は、もともと文末にある胡応麟の批評である。元簡はこの節をここに移し、胡応麟がもつ宋版テキストに対する客観的態度を賛称しようとしている。また、多くの蔵本を

保存しなければ校正に使える資料が不足することを強調するのも、元簡の蔵書志向に関わっていると言えよう。

『少室山房筆叢』に、「四部正偽」「丹鉛新録」など考証的内容がある。元簡のこういう考証学学術との接触は、彼自身の学術的アプローチにおいて、少なからず影響を与えたと思われる。

さらに、『樞中鏡』は『読書敏求記』にある唐の旋風葉装訂(伝抄本本篇の55番)に関して集録している。元簡はその案に、方以智の『通雅』を引用し、書物の装訂発展について論じている。本文の最後に、方以智の『物理小識』を引用し、書物の保存について記してある(伝抄本本篇の65番)。方以智(1611~1671)は、明末清初の学者であり、自然を認識する方法論を構築しようとした点が指摘されている³⁷⁾。その科学的史観の研究は、後の清朝考証学の発展の礎となっている。例えば、紀昀は四庫全書本の『通雅』提要に、「然以智崛起於崇禎中，考拋精核，迥出其上，風氣既開，國初顧炎武，閻若璩，朱彝尊等沿波而起，始一掃懸揣之空談，其中千慮一失，或所不免，而窮源溯委，詞必有証，在明代考証家中，可謂卓然獨立者矣」と高く評価している³⁸⁾。『通雅』には名物訓詁の内容が非常に多く、清の学术界への影響も大きかったと思われる。また方以智は博識で医学に関する論述も多数ある。元簡が『通雅』『物理小識』などの著述と接触したことは、その学術的アプローチにおいて重要な意義があると考えられる。

また、元簡の学術的アプローチには、尊敬する学者の著作を踏襲する傾向があった。町泉寿郎氏は、「朱彝尊『經義考』に倣った『医籍考』一元簡の子元胤の遺著を元胤の弟元堅が完成一も元簡在世中に構想着手されていた³⁹⁾と論じている。『樞中鏡』の序文に述べているように、元簡は朱彝尊・錢曾を見習うべき蔵書家と考えていたようである。町氏の指摘のように、元堅は天保2年(1831)兄元胤の著書『医籍考』の序に、以下の通り述べている。

先君子櫟蔭先生，……又欲撰医籍考一書，以弁医学源流，有志未果。先兄岐嶷夙成，一以述家

学為念、于先君子未完之緒、必加修補、而以目錄之學、為道術之範圍、學問之綿蕪、……自歷代史志、各家藏目、以至詩文賦頌、山經地志、陸記贖說、事涉醫書者、悉莫不討搜蒼萃、而況於醫書之見存者、必弁其雅俗、鑒其真贗、倣朱錫鬯經義考之體、每書先揭其名、次以卷第、次以存佚未見、次以諸家序跋、撰人履歷、而次以考語、尋端竟委、訂譌闢謬、義例詳密、援摭精覈、凡八十卷。……

この序によると、『医籍考』は朱彝尊の『経義考』の文体を模倣したものと明らかである。『医籍考』は多紀元簡が構想した書物なので、元胤が『医籍考』を著す時に、朱彝尊の『経義考』の文体に従ったことは、元簡の意志に沿った可能性が高い。元簡が朱彝尊の論述形式に倣ったことを見ると、その研究姿勢を模範としたことも明白であろう。

上述してきたように、元簡の蔵書から得た知識と考証学的考究が、『樞中鏡』に凝縮されていると言えるだろう。明清に刊行された學術書を収集し、最新の考証学に触れたことで、版本の比較が元簡の研究の中心となっていた。そのため、先学に倣った著作やアプローチによって、医学考証学という分野を拓き、医学考証学派を形成するに至った。そして、『樞中鏡』に蔵書から得た知識及び考証学的考究が凝縮され、その後の貴重な研究資料となされていったのだろう。

おわりに

本研究は、多紀元簡による著述『樞中鏡』について紹介・検討し、多紀元簡の蔵書と学問との関連を論じてきた。まず、現存する『樞中鏡』の諸伝本の所在と概略について調査し、『樞中鏡』の伝抄本が江戸後期から近世に至るまで知識人の間に流通していたことを明らかにした。次に、『樞中鏡』伝抄本と自筆本の内容について分析し、当書の性質、その編纂過程及び使用した資料の特徴を明示した。最後に、『樞中鏡』にみる多紀元簡の蔵書志向と元簡の学術的アプローチについて検討を試みた。

『樞中鏡』の考察を通じて、当書の諸伝本の内容と系統を究明し、多紀元簡が中国同時代の學術書の価値を十分理解していたことを明らかに出来た。また、元簡ないし医学考証学派と明清の學術との出会いがもたらした学術的転換を、今後の研究課題として別稿に譲りたいと思う。

謝辞

本稿執筆にあたって、無窮会所蔵自筆本の複写本は元北里大学東洋医学総合研究所医史学研究所小曾戸洋氏及び二松学舎大学文学部中国研究科町泉寿郎氏のご好意により使用させて頂いた。両氏に深く感謝を申し上げる。

また、各伝本資料の調査にあたって、京都大学吉田南図書館・京都大学文学研究科図書館・筑波大学附属図書館・茨城大学附属図書館・石川武美記念図書館・西海市岩瀬文庫・高梁市社会教育科の林悦子氏・山田方谷記念館に多大なるご協力を頂いたことに感謝する。

※本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費(19J15164)の助成を受けたものである。

参考文献

- 1) 森潤三郎. 多紀氏の事跡. 京都: 思文閣出版; 1985
- 2) 町泉寿郎. 医学館の学問形成(一〜三). 日本医史学雑誌 1999-2000; 45-46
- 3) 町泉寿郎. 医学館の軌跡—考証医学の拠点形成をめぐって. 杏雨 2004; 7: p. 35-92
- 4) 廖育群. 漢方医学の落日余暉: 江戸考証派的學術与社会. 九州学林 2006; 4(2): p. 74-129
- 5) 金谷治. 日本考証学派の成立—大田錦城を中心として—. 源了円編. 江戸後期の比較文化研究. 東京: ぺりかん社; 1990. p. 38-88
- 6) 町泉寿郎. 江戸後期医学の場合—幕府医学館の学績を中心として—. 日本思想史学 2003; 35: p. 30-36.
- 7) 森潤三郎. 考証学論考—江戸の古書と蔵書家の調査. 東京: 青堂堂書店; 1997
- 8) 森潤三郎. 多紀氏の事跡. 京都: 思文閣出版; 1985
- 9) 国書総目録補訂版. 東京: 岩波書店; 1989-1991
- 10) 複製本はモノクロのため、蔵書印がかなり薄く見にくい状態で、判断が困難である。他の書誌情報も、複製本では検討しにくいところがある。
- 11) 佐藤静馬. 脩古軒雜集. 神戸: 脩古山房; 1973. p. 129
- 12) 森潤三郎. 多紀氏の事跡. 京都: 思文閣出版; 1985.

- p. 273
- 13) 郭秀梅, 真柳誠. 多紀元堅の著述. 漢方の臨床 1995; 42(10): p. 1247-1255
 - 14) 「樞」はJIS第四水準漢字に対応していないため, システムでは正確に表示できず, 後記岩瀬本もこのような登録となっている.
 - 15) 石坂白脚の誤か.
 - 16) 森潤三郎. 多紀氏の事跡. 京都: 思文閣出版; 1985
 - 17) 茨城大学附属図書館. 茨城大学附属図書館蔵菅文庫国書目録. 水戸: 茨城大学附属図書館; 1981. p. 8下
 - 18) 蘇峰先生古稀祝賀記念刊行会. 成篋堂善本書目. 民友社; 1932. p. 398
 - 19) 蘇峰先生古稀祝賀記念刊行会. 成篋堂善本書目. 民友社; 1932
 - 20) 児玉享・長沢孝三編. 高梁市立中央図書館所蔵古書分類目録. 高梁: 高梁市教育委員会; 2009. p. 182
 - 21) 二松学舎大学大学資料展示室運営委員会編. 三島中洲と近代—其六一—. 東京: 二松学舎大学附属図書館; 2013. p. 18. 山田準「詩文稿」において, 「猗々社」とある用箋が使用されている.
 - 22) 岩瀬文庫函番号(資料番号) 103-85『二〔木偏・扌〕中鏡』の目録データにおいて, 「内容」に記述されている.
 - 23) 明治以後の収蔵者・機構は略す.
 - 24) 明末清初の学者の場合, 引用した書物の成書年代に従う.
 - 25) 引用書の作者と一致する場合空いたままにする.
 - 26) タイトルは, 元簡が提示している場合そのまま使い, 提示していない場合は原書にあるタイトルを使う.
 - どちらもない場合は首句を使う.
 - 27) *がついている書名の指す書物はまだ確認できていない.
 - 28) 山田文庫本における朱筆注記の筆跡は本文と一致し, 内容は, 抄写者である山田準によるものと判断できる.
 - 29) 多紀元簡. 櫟蔭草堂文集. 京都大学附属図書館富土川文庫蔵写本
 - 30) 金谷治. 日本考証学派の成立—大田錦城を中心として—. 源了円編. 江戸後期の比較文化研究. 東京: ぺりかん社; 1990. p. 59
 - 31) 多紀元簡. 傷寒論輯義. 1801. 1822. 万笈堂
 - 32) 多紀元簡. 櫟蔭草堂文集. 京都大学附属図書館富土川文庫蔵写本
 - 33) 森約之. 存誠菴室蔵儒書目. 1865. 国立国会図書館蔵写本
 - 34) 町泉寿郎. 江戸後期医学の場合—幕府医学館の学績を中心に—. 日本思想史学 2003. 35: p. 30-36
 - 35) 多紀元簡. 扁鵲倉公伝彙攷二卷攷異一卷備参一卷. 万笈堂英大助. 1849
 - 36) 林慶彰. 明代考据学研究. 上海: 華東師範大学出版社; 2015. p. 193-306
 - 37) 坂出祥伸. 方以智の思想. 戴内清, 吉田光邦編. 明清時代の科学技術史. 京都: 京都大学人文科学研究所; 1970
 - 38) 方以智. 通雅. 欽定四庫全書本. 浙江大学図書館所蔵
 - 39) 町泉寿郎. 江戸後期医学の場合—幕府医学館の学績を中心に—. 日本思想史学 2003; 35: p. 32

A Study on *Kochūkyō* by Taki Motoyasu

CHENG Gaoya

Doctoral Course, Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

In this article, we discuss *Kochūkyō* by Taki Motoyasu, a representative person of the school of evidential studies of medicine, with special reference to the relationship between Taki Motoyasu's book collection and his studies. First, we investigate and discuss the location and summary of existing manuscripts of *Kochūkyō*. We show that manuscripts of *Kochūkyō* were distributed among intellectuals from the late Edo period to the early-modern times. Next, we analyze the contents of *Kochūkyō*'s manuscripts, and clarify the features of the book, its editing process and materials used. Finally, we discuss the of purpose of Taki Motoyasu's book collection and the academic approach of his studies via *Kochūkyō*. Through our analysis of *Kochūkyō*, various versions of manuscripts of this book were investigated and classified, and it became clear that Taki Motoyasu sufficiently understood the value of academic books of the same period in China.

Key words: Taki Motoyasu, *Kochūkyō*, school of evidential studies of medicine